

名前：

現代はインターネットの時代だ、と言われているようになって久しい。インターネットは電子媒体であるから、確かに紙媒体である新聞や雑誌にくらべ速報性が強く、また安価に情報を伝達することができると言う。ただ、そういったインターネットの利点を考慮しても、新聞や雑誌が果たすべき役割は残る、と私は考えている。その理由は三つある。

まず挙げられる事実として、いわゆるデジタル・デバイドの問題がある。情報と自らを結ぶ環境としてのインターネットは、高齢者世帯や途上国では未だ十分に整備されていない。その状況で紙媒体が失われれば、人々の間に地域、世代などによる深刻な情報格差が生まれる可能性が高い。

この問題と関連するが、第二の理由として、情報を享受する側が負担するコストの問題が考えられる。情報を受信する機器であるパソコンやそれに付随するソフトウェアを導入するには多額の初期負担が必要なのである。さ

らに、パソコンの前に座っていなければならないという、インターネットの場所的制約を解決した携帯電話にもコスト面の問題がある。日本の携帯電話の料金体系にもその原因があるが、携帯電話の通信料は非常に割高である。そう考えると、紙媒体から電子媒体への移行で得をするのはメディア産業の側であり、情報の消費者である我々には、コスト面から見たメリットは少ない、と言って良い。

最後に、情報の質の問題もある。インターネットは速報性に優れている反面、不確実な情報が「事実」として一斉に世界中に広まる危険性がある。丁寧に証拠を読み上げ、報道される側の権利にも配慮した報道のあり方を理想とするならば、その理想は、情報入手から配達までに時間差のある紙媒体の方でむしろ達成されるだろう。

これらの課題はいつか解決され、その時こそが真の「インターネット時代」の幕開けとなるだろう。しかし当面、紙媒体はその役割を保つであろう。

1800字